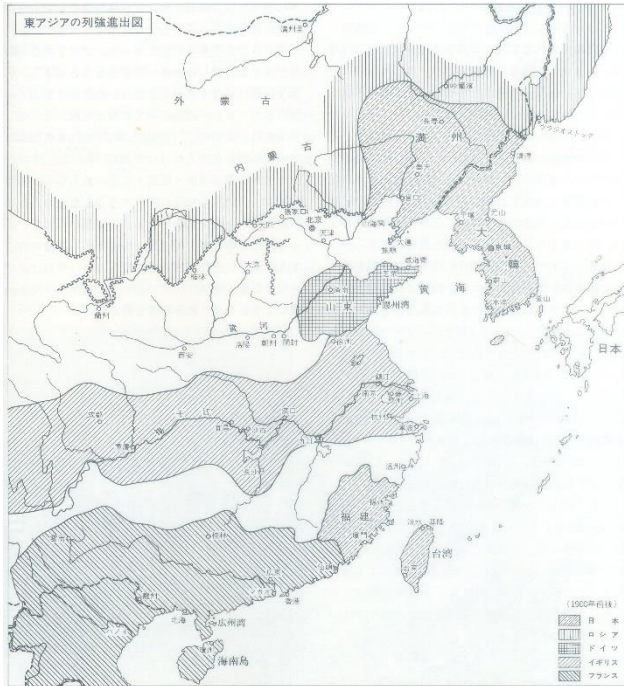


帝国主義・・・植民地獲得の競争激化



東アジアの列強進出図

19世紀の末には、欧米の資本主義はますます発達し、製鉄業、機械、化学、石油、鉄道などを中心に、巨大な企業があらわれ、一社または数社でそれぞれの分野の産業を独占しました。これらの企業は大銀行と結びついて、その国の経済や政治を動かしました。また、海外で商品売りさばき、原料を買い付けるだけでなく、資本を送り込んで、現地の人を安い賃金で雇い、工場や鉱山鉄道を経営しました。その企業の利益を守るため、軍事力で現地の人々の抵抗をおさえ、植民地や勢力範囲をひろげていきました。

(図 出典 『日本の歴史 5』 ほるぷ出版)

日露戦争・・・中国東北部、朝鮮の支配権を争う

日清戦争で清国が敗れると、欧米の列強は競って中国に進出しました。ロシア、イギリス、フランス、ドイツは、中国の重要な地点を租借地とし、鉄道や鉱山の利権を得て、中国を支配しようとしていました。

列国の侵略に対して、中国の民衆は義和団の乱をおこしました。列国は1900(明治33)年、日本軍とロシア軍を主力とする連合軍を送り、義和団を破り、清国に多額の賠償金を払わせ、北京に外国の軍隊を置くことを認めさせました。義和団の乱後も、フランスに支持されたロシアは満州を占領し、朝鮮にもロシアと結ぶ政府ができて、日本の力は弱まりました。そこで、イギリスと日英同盟を結びました。

1904(明治37)年2月、日本海軍がロシア艦隊を攻撃して、日露戦争を始めました。陸軍は朝鮮から満州へと進み、旅順 奉天で苦戦しながらもロシア軍を破り、東郷平八郎がひきいる海軍の連合艦隊はバルチック艦隊を日本海海戦で破りました。戦争が始まると、多くの兵士が戦場に送られ、動員兵109万人の内、10万人が戦病死し、17万人が負傷するという多数の犠牲者を出しました。



与謝野晶子の詩「君死にたまふことなかれ」



君死にたまふことなかれ
——旅順口包圍軍の中に在る弟を嘆きて
与謝野 晶子
あゝ、をとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさはまじりし
親は刃(やいば)をにぎらせて
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや
堺の街のあきびとの
旧家(きゅうか)をはこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとも何事か
君知るべきやあきびとの
家のおきてに無かりけり
君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみずからは出でまされ
かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこころの深ければ
もとよりいかで思(おも)へられむ
あゝ、をとうとよ戦ひに
君死にたまふことなかれ
すぎに秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家(か)を守(も)り
安しと聞ける大御代(おみよ)も
母のしら髪はまさりけり
暖簾(のれん)のかげに伏して泣く
あゝ、かにわかき新妻を
君わするるや思へるや
十月(つき)も添はでわかれたる
少女(こ)ころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あゝ、また誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ